



子どもたちにおくるメッセージ

# 愛されていることに 気づいたとき

歌手  
すぎやま ゆう た ろう  
杉山裕太郎



## プロフィール

1974年岐阜県生まれ。少年時代は優等生だったが、大人に対する不快感から中学を境に非行に走りはじめ、暴走族リーダーや薬物乱用など、人生のどん底を経験する。23歳のとき、親との和解を機に愛情に目覚めて再出発し、教師にあこがれて大学へ入学、教員免許も取得したが、「歌で世の中の人に勇気を与えたい」と考え、歌手として音楽活動を行うために上京した。過去の経験を生かして、青少年健全育成や犯罪被害者支援などの活動に力を入れ、日本全国での歌を交えた講演ライブ活動を中心に役者やラジオパーソナリティなどマルチに活躍中。

杉山裕太郎オフィシャルホームページ <http://yutarosugiyama.com>

「裕太！ 今までお前の気持ちを分かってやれなくて悪かった！ いいか！ お前はお父さんとお母さんの大事な息子なんだぞ！ だから頼むから、もうそんなことやらないでくれ！」そう言って、父は私の体を強く抱きしめながら、母と共に泣き崩れた。それと同時に、冷め切っていた私の心に温かいものが込み上げてきて、私も嗚咽しながら一時間以上泣き続けた。今から十二年前の二十三歳の夜のことである。

幼少期から小学生、中学生の途中くらいまでは、学級委員を務めるような優等生だった私は、自分のことを理解してくれないと感じていた両親や教師の心無い言葉に傷付き、周囲の友人ともよい関係が築けず、次第に大人や社会に対して反発心を強めながら、非行に走っていった。

高校を二か月で中退し、万引き、カツアゲ、シンナーなどの犯罪に手を染め、暴走族のリーダーになるなど、手の施しようのない状態にまで堕ちていった。そのころの私は、「どうせ俺のことなんて、だれも分かってくれないし、愛してもらえない。だから、自分の人生なんてどうなってもいいんだ」という孤独で寂しい気持ちと、自暴自棄な感情を抱いていた。そしてとうとう覚せい剤にまで手を出してしまった。覚せい剤は、

してくれたことによって、私も両親のことを理解したいと思えるようになった。つまり、人を思いやる気持ちにも目覚めることができた。

あの夜のことがなければ、今ごろ私は廃人になっていたかもしれないし、もつと人の傷みの分からない人間になって犯罪を犯し、だれかを傷付けていたかもしれない。あのどん底にいる私を受け入れ、手を差し伸べて救ってくれた両親には、今でも心から感謝している。そこから私は、両親の支えによって薬物中毒を克服し、二十五歳で大学に入学した。大学では法律と教職の勉強に励み、年下の同級生たちと共に有意義な大学生活を送り、教員免許や宅建免許を取得した。

次第に私の体と心を蝕み、幻覚や幻聴といった中毒症状を引き起こし、ついには自分の力では止められないほどになっていった。

完全に冷静な判断ができなくなっていた私は、両親と喧嘩になった十二年前のあの夜、「俺は、お前らのせいでこうなったんや」と叫びながら、両親の目の前で覚せい剤を腕に注射して見せて反発した。今思えば、自分のお腹を痛めて産んだわが子の悲惨な姿を見た母は、どれだけつらかっただろう。何て親不孝な息子だろうと、そう思う。そのときの両親の悲しい顔は、今でも忘れない。だが、そのときの私は、両親の心の傷みが分からない人間になっていたし、両親のつらさと同じか、あるいはそれ以上に深刻な覚せい剤中毒に苦しみ、心の痛みを抱えていた。両親は、そんな私を見捨てることなく、本気の言葉と抱擁によって、愛情を与えてくれた。「お前は大事な息子なんだ！」と、はつきり口に出して言ってもらったことによって、私は「生まれたときからずっと愛されていたんだ」ということを実感し、「大切な父と母を、もう悲しませてはならない。自分の命や人生は尊いものなのだから、大切に生きていかなければならないんだ」ということに気付くことができた。また、両親が私のことを理解

人間はだれしも一人では生きていけない。私だって君たちだって、みんな愛されるべき命であり、大切な存在だ。だからこそ、周りの自分の大切な人たちに、感謝の気持ちや謝罪の気持ちを照れずにきちんと言葉で伝え、支え合って生きていくことが大切だと思ふ。「いつもおいしいご飯作ってくれてありがとね」「いつもお仕事ご苦労様」と両親に伝えたり、「お前のおかげでいつも楽しいよ、ありがと」と友達に伝えたりする。そう言われた相手は心が幸せになって君を必要とし、君自身も心が幸せになって人間としても成長していきける。

もしも、周りにだれも味方がいなくて孤独を感じたなら、大声を出して助けを求めればいい。それは決して恥ずかしいことじゃない。必ず心ある人が手を差し伸べてくれる。

一人ぼっちで寂しいのは人間にとって当然のことなんだ。だから、寂しさを感じても、君たちは間違っていないんだよ。逆に一人ぼっちの人を見つけたら、一言声を掛けてあげてほしい。「君は一人じゃないんだよ」と。君たちの人生はたった一度しかない尊いもの。だからどうか自分の人生を大切に生きてほしい。十二年前の私のような人間には絶対にならないほしい。